

## ◇編集後記◇

「校正印刷工に胆管がんが多発」というニュースは、職業がんの疫学をテーマとして研究の世界に入った自分にとって、大きな驚きでした。何より、私自身が研究を始めた時には既に同世代でこのテーマを選ぶ研究者はほとんどなく、以後、自己紹介の際には「絶滅危惧種」を名乗っているくらいですから、いまさら、ここまで大きな「事件」が起こるとは思ってもいませんでした。

もちろん、ばく露から職業がん発症までの時間差のことを考えると、日本の労働環境が以前に比べると良くなり、問題が容易に顕在化することがなくなったとしても、私たちが認識できないところで「こと」は進んでいるはず。そんな思いを抱えながら、かといって研究につなげられるわけでもなく、無為に時間だけが過ぎてこのありさまで。「職業がんはもう終わった」と用済みにされるのであれば気は楽なのですが、突きつけられた現実からは、自らの力のなさをただただ思い知らされるだけで、何ともやり切れません。

この「事件」を巡って、臨床医の皆さんと話をしている、いまさらながらに思い知らされたのが、「患者の職業・職歴を聞くことのむずかしさ」です。ラマツィーニを持ち出すまでもなく、問診の際には必ず職業・職歴を聞く、それは産業医学の専門家だけの話ではなく、すべ

ての医師（この際ですから医療従事者としましょうか）にとって必要なことであつたはずですが、実際には「過去の胆管がんの症例を調べてみたけれど、職歴欄はほとんど空白だった」、それが現実ではないでしょうか？

職業がんの疫学研究に没頭していたころ、一つずつ証拠を積み上げて因果関係を立証しようとするそのプロセスが、まるで事件の解決を目指す探偵のようで、正直わくわくしながらデータの解析に時間を費やしていました。しかし、私たちの研究の本質は、きっとそんなところにはないのだと思います。本来の役割（患者の職業・職歴の記録もその一つだと思いますが）を果たせない限り、職業性健康障害はリバイバル・サバイバルを繰り返す。産業保健のコミュニティ自体、その存在価値を問われることになるように思われてなりません。

さて、これからの自分に何ができるか。「一日の3分の1は労働、人生の2分の1も労働、だから患者には職業を聞かなければならない」。とりあえず、学生に話をする機会が与えられるたびに、この言葉を繰り返しています。

(毛利一平)

## 「産業衛生学雑誌」編集委員会

委員長：益島 茂（三重大）

副委員長：樺田尚樹（国立保健医療科学院）、杉森裕樹（大東文化大）、高尾総司（岡山大）、  
玉腰暁子（北海道大）、那須民江（中部大）、西田和子（久留米大）、平工雄介（三重大）、  
藤野善久（産業医大）、毛利一平（三重大）、八谷 寛（藤田保健衛生大）

石竹達也（久留米大）、井上和男（帝京大）、植嶋一宗（津保健福祉事務所）、梅津美香（岐阜県立看護大）、小笹晃太郎（放射線影響研）、萱場一則（埼玉県立大）、川口陽子（東京医歯大）、熊谷信二（産業医大）、黒沢洋一（鳥取大）、近藤尚己（東京大）、酒井一博（労働科学研）、佐々木美奈子（東京医療保健大）、菅沼成文（高知大）、田中昭代（九州大）、土井由利子（国立保健医療科学院）、中尾睦宏（帝京大）、中村裕之（金沢大）、馬場園明（九州大）、原田浩二（京都大）、東 尚弘（東京大）、福島哲仁（福島県立医大）、堀口兵剛（秋田大）、丸山総一郎（神戸親和女子大）、三木明子（筑波大）、三宅達郎（大阪歯大）、村田勝敬（秋田大）、八幡勝也（産業医大）、大和 浩（産業医大）、吉田貴彦（旭川医大）、渡邊博且（産業医大）

〒160-0022 東京都新宿区新宿1丁目29番地8 公衆衛生ビル4階

電話 03-3356-1536 ファックス 03-5362-3746 振替 東京 00100-7-133495 番